

第33回 くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート  
ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト [since 2012] Vol.8

# 仲道郁代のベートーヴェン

～「悲愴」「月光」「熱情」「告別」～

ピアノ  
仲道郁代

ナビゲーター

西原 稔 (桐朋学園大学音楽学部教授)

2019年5月12日(日) 午後2時開演

一橋大学兼松講堂

主催: ボランティアチーム如水コンサート企画

後援: (社)如水会・新三木会・国立市・国立市教育委員会・国立市社会福祉協議会・(公財)くにたち文化・スポーツ振興財団・国立市商工会  
国立市観光まちづくり協会・国立市商業協同組合・国立商工振興(株)・国際ソロプチミストくにたち

協力: 一橋大学管弦楽団、「Café ここのたの」(一橋大まちづくりサークル)

## くにたち兼松講堂へようこそ

2005年から始まった「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」は、お陰さまで、15年目、第33回目を迎えました。単なる名曲ア・ラ・カルトではなく、大学の講堂での公演に相応しい“テーマ”を掲げ、あるいは斯界で活躍する一流の演奏家の招聘に努めて参りました。

そのテーマの1つが、2020年の楽聖ベートーヴェンのメモリアル・イヤーを目指して2012年からスタートした《ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト・シリーズ》です。

その第8回目となる今回は、デビュー当初よりベートーヴェンを極める旅を続ける仲道郁代さんをお迎えし、楽聖の「初期」・「中期」のピアノ・ソナタの傑作をご披露いただきます。

また、桐朋学園大学の西原稔先生には、ほぼ毎回、当コンサートのナビゲーター役をお引受けいただいております、改めて厚く御礼申し上げます。

なお、本公演に対しては、(公財)くにたち・文化スポーツ振興財団の助成ならびにスタンウェイ・ジャパン株式会社、国立市内の有名店各社のご賛助を頂いております。変わらぬご支援に感謝申し上げます。

おって、当講堂は1927(昭和2)年竣工の歴史的建造物(国の登録有形文化財)でもあり何かとご不便をおかけいたしますが、このホールのもつ自然な響きの中で、どうぞ最後までごゆっくりお楽しみ頂ければ幸いです。

ボランティアチーム 如水コンサート企画

## LUDWIG VAN BEETHOVEN (1770~1827)

### ピアノ・ソナタ 第8番 ハ短調 作品13 『悲愴』 (1797~98年)

- I. Grave ~ Allegro di molto e con brio
- II. Adagio cantabile
- III. Rondo: Allegro

### ピアノ・ソナタ 第14番 嬰ハ短調 作品27-2 『月光』 (1801年)

- I. Adagio sostenuto
- II. Allegretto
- III. Presto agitato

### 休憩 (20分)

### ピアノ・ソナタ 第23番 ヘ短調 作品57 『熱情』 (1804~05年)

- I. Allegro assai
- II. Andante con moto
- III. Allegro ma non troppo

### ピアノ・ソナタ 第26番 変ホ長調 作品81a 『告別』 (1809~10年)

- I. 告別 (Das lebewohl) Adagio-Allegro
- II. 不在 (Abwesenheit) Andante espressivo
- III. 再会 (Das wiedersehen) Vivacissimamente



世界のトップアーティストに  
選ばれるスタインウェイ

スタインウェイ・ジャパン株式会社

Tel. 03-5251-6550  
www.steinway.co.jp

# Profile

## 仲道 郁代 Ikuyo NAKAMICHI



©Kiyotaka Sato

4歳からピアノを始める。桐朋学園大学1年在学中に第51回日本音楽コンクール第1位、増沢賞を受賞。ジュネーヴ国際音楽コンクール最高位、メンデルスゾーン・コンクール第1位、メンデルスゾーン賞、エリザベート王妃国際音楽コンクール第5位と受賞を重ね、以後ヨーロッパと日本で本格的な演奏活動を開始。88年に村松賞、93年にモービル音楽奨励賞を受賞。

これまでに国内の主要オーケストラと共演するほか、マゼール指揮ピッツバーグ交響楽団、バイエルン放送交響楽団、フィルハーモニア管弦楽団、ズッカーマン指揮イギリス室内管弦楽団(ECO)、ブルゴス指揮ベルリン放送交響楽団、P.ヤルヴィ指揮ドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団など海外オーケストラとも多数共演。室内楽も活発に行い、今までにリチャード・ストルツマン、ヨセフ・スーク、ハーゲン弦楽四重奏団、ブランディス弦楽四重奏団、ゲヴァントハウス弦楽四重奏団、ベルリン・フィル八重奏団等と日本ツアーを行った。

1999年にはカーネギーホールでリサイタル・デビュー、2001年にはサンクトペテルブルグ、ベルリン・フィルハーモニーホールでコンチェルト・デビュー。

2005年には、英国チャールズ皇太子夫妻ご臨席のもとウィンザー城で行われたイギリス室内管弦楽団(ECO)主催の「結婚祝祭コンサート」に出演し絶賛された。

CDはソニー・ミュージックジャパンと専属契約を結び、『ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全集』（レコード・アカデミー賞）、『モーツァルト：ピアノ・ソナタ全集』、そのほか『シューマン・ファンタジー』など、高い評価を得ている。

著作に『ピアニストはおもしろい』（春秋社）等がある。メディアへの出演も多く、音楽の素晴らしさを広く深く伝える姿勢は多くの共感を集めている。

2017/2018シーズンより、ベートーヴェン没後200周年の2027年に向け、「仲道郁代 Road to 2027 プロジェクト」をスタート、リサイタルシリーズを展開している。

一般社団法人「音楽がヒラク未来」代表理事、一般財団法人地域創造理事、桐朋学園大学教授、大阪音楽大学特任教授。

オフィシャル・ホームページ <http://www.ikuyo-nakamichi.com>

## 西原 稔 Minoru NISHIHARA



山形県生まれ。東京藝術大学大学院博士課程満期修了。桐朋学園大学音楽学部教授。

18、19世紀を主対象に音楽社会史や音楽思想史を専攻。

著書に『音楽家の社会史』、『聖なるイメージの音楽』、『音楽史ほんとうの話』、『ブラームス』、『シューマン全ピアノ作品の研究』（以上、音楽之友社）、『クラシック 名曲を生んだ恋物語』（講談社）、『「楽聖」ベートーヴェンの誕生』（平凡社）、『クラシックでわかる世界史』、『ピアノ大陸ヨーロッパ』（以上、アルテスパブリッシング）、『世界史でたどる名作オペラ』（東京堂出版）、『ピアノの誕生・増補版』（青弓社）などの著書のほかに、共著・共編で『ベートーヴェン事典』（東京書籍）、訳書に『魔笛とウィーン』（平凡社）、監訳・共訳で『ルル』、『金色のソナタ』（以上、音楽之友社）、『オペラ事典』、『ベートーヴェン事典』（以上、平凡社）などがある。

「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」の『ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト・シリーズ』では、監修ならびにナビゲーターをお引受けいただいている。



中庭に面した明るく落ち着いた  
雰囲気の店内でイタリア料理を  
お楽しみください

お電話でのご予約をおすすめします

**レストランテ国立文流 TEL.042-571-5552**

東京都国立市東 1-6-30 パティオマグノリア1F(JR 国立駅(南口)より徒歩3分)

◆営業時間：昼 11:30 ~ 14:30(L.O.) 夜 17:00 ~ 21:00(L.O.)

◆姉妹店 レストランテ高田馬場文流 TEL.03-3208-5447



# Program Note

## ピアノ・ソナタ 第8番 ハ短調 作品13『悲愴』(1797～98年)

〈月光〉や〈熱情〉などは同時代の詩人や楽譜出版社がつけたニックネームだが、全32曲のピアノ・ソナタのなかでベートーヴェン自身がつけたタイトルは〈悲愴〉と〈告別〉だけである。〈悲愴〉は出版譜の初版表紙に「グランド・ソナタ悲愴“Grande sonata pathétique”」と記されていたことに由来する。

作曲はベートーヴェン28歳の時。「初期」の最高傑作のひとつであるが、知名度や演奏頻度が極めて高いのは、作品の素晴らしさは勿論、このタイトルが寄与している一面も。

第1楽章の冒頭の低音域の強烈な序奏を聴くと、第1～3番のソナタ(Op.2-1～3)から僅か4年後の作品とは到底思われず、“変革者”ベートーヴェンの面目躍如である。この序奏の旋律は展開部や終結部にも姿を現すのが極めて印象的。祈りと詩情に満ちた第2楽章はベートーヴェンの書いた緩徐楽章の傑作の一つ。第3楽章は軽快だが、緊張感を湛えたロンドのフィナーレ。

## ピアノ・ソナタ 第14番 嬰ハ短調 作品27-2『月光』(1801年)

作曲家自身はOp.27の2曲を「幻想風ソナタ“Sonata quasi una Fantasia”」と名付けているが、この〈月光〉というネーミングは、よく知られているようにドイツの詩人L.レルシュタープ(1799～1860)が第1楽章の幻想的な美しさを「月の光に照らされたスイスのルツェルン湖の波にたゆたう小舟のよう…」と形容したことに由来するもので、この曲を不朽の名作たらしめている。

古典的なソナタでは、重要視される冒頭のソナタ楽章を欠き、瞑想的なアダージョの緩徐楽章で始まり、次いで間奏曲風の短い簡潔な楽章の後に、堂々たる終楽章が置かれて全曲の頂点を形成。荒々しいエネルギーに満ちた第1主題とやや暗さを湛えた和音が連打される第2主題によるソナタ形式で、息詰まるような展開を見せる。

ここにも伝統的形式にとらわれない“変革者”の姿がある。

## ピアノ・ソナタ 第23番 ヘ短調 作品57『熱情』(1804～05年)

このソナタは〈月光〉から3年後に書かれたが、この頃、持病の難聴が進みながらも、苦悩を克服し新たな創造への決意を記したいわゆる『ハイリゲンシュタットの遺書』(1802年)を経て、ベートーヴェンは「中期」の“傑作の森”(ロマン・ロラン)に分け入る時期となる。〈熱情〉と相前後して、ピアノ・ソナタ第21番〈ワルトシュタイン〉、ヴァイオリン・ソナタ〈クロイツェル〉、交響曲第3番〈英雄〉、ピアノ協奏曲第4番、弦楽四重奏曲〈ラズモフスキー〉、歌劇〈フィデリオ〉など、眩いばかりの傑作が生まれている。

一方、この時期は(現代のIT革命による産業の変革さながらに)ピアノの技術革新が進み、ベートーヴェンは親友から最新のフランス製エラル・ピアノを贈られた(1803年8月)。それまで愛用してきたヴァルターやシュトライヒャー・ピアノの明瞭で軽いタッチの音と比べて、音域も拡がりペダル機構も操作性に優れ、かつ大音量で重量感のある音に変わって、大いに創作意欲を掻き立てられて〈ワルトシュタイン〉や〈熱情〉が生まれている。

第1楽章は、弱音で厳かに立ちあがって来るように始まり、交響曲第5番やピアノ協奏曲第4番に共通する「運命の動機」が支配する激しく闘争的な気分溢れた壮大な楽章。

第2楽章は主題と4つの変奏からなり、束の間の安らぎを湛えているが、アタッカでそのまま怒涛のような第3楽章に突入する。

大きな感情的起伏、古典的な様式観、革新的なピアノ書法が一体となったピアノ・ソナタの屈指の作品といえよう。

## ピアノ・ソナタ 第26番 変ホ長調 作品81a『告別』(1809～10年)

1809年、ナポレオン軍は1805年に続いて2度目のウィーン侵攻に赴く。皇帝や貴族たちは戦火を逃れてウィーンを離れることになるが、ベートーヴェンの最大のパトロンであり、作曲の弟子でもあったルドルフ大公(兄は皇帝フランツ1世)も疎開する事態となった。

このソナタは敬愛する大公との別離を機に作曲を開始(第1楽章「告別」)、フランス軍が撤退するまで約半年間(第2楽章「不在」)、翌1810年初めの大公の帰還(第3楽章「再会」)まで、ベートーヴェンの内面の機微をいわば標題音楽的に描いたもの。

第1楽章(告別)の冒頭の、ゆったりと奏される3つの音符(ト～ヘ～変ホ)には〈Le-be-wohl(さようなら)〉と記されている。この「告別」の動機は楽章の随所に現れて寂しさを漂わせている。

第2楽章(不在)は、寂寥感に溢れる嘆きの歌。ところが大公帰還の報が届いたのであろうか、突如としてそのまま切れ目なく第3楽章(再会)になだれこみ、再会の歓喜に満ちた生き生きとした終曲となる。

# Pianists in Kanematsu

## ピアニストたちの兼松講堂

現在、国の登録有形文化財に指定されている兼松講堂は昭和2(1927)年に竣工。その響きの良さもあって往時より内外の一流演奏家が多数来演しています。

ピアニストの方々だけを見ても、原智恵子、安川加寿子、田中希代子、ラド・ルプー、イングリット・ヘブラーなど。その後、アシュケナージ(指揮・独奏)/チェコ・フィル(2001年)、講堂大改修の柿落し演奏会でベートーヴェンの協奏曲「皇帝」を弾かれた園田高弘(2004年)や、2000年のショパンコンクール第2位のイングリット・フリッター(2007年)などの皆さんのほか、「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」(2005年～)のステージには、伊藤恵、神谷郁代、野原みどり、江口玲、野平一郎、迫昭嘉、田部京子などの皆さんに加えて、梯剛之、菊地裕介、小菅優、福間洸太郎、浜野与志男ほか新進気鋭の方々も多数登場。

今回の仲道郁代さんのご出演で、兼松講堂のピアノ演奏史に新たな1ページが加わりました。



★2006年5月14日(日)第4回「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」  
『吉野直子とアンサンブル・ウィーン=ベルリン』プログラムより転載

～激動の昭和史の中の兼松講堂～

### “原智恵子、ベヒシュタインピアノそして兼松講堂”

時は太平洋戦争の敗色が漂い始めた頃…。開戦当初の戦意高揚のスローガン「撃ちてしままん」もいつしか「一億玉碎」に変わり、昭和18年、学生の徴兵猶予が停止され学徒出陣が始まった。翌、昭和19(1944)年10月、この兼松講堂において本学学生の出征学徒壮行会が行なわれた。

2、3人の教授の壮行の辞につづいて演壇に立たれた山口茂教授の力強い第一声は「諸君、どうか死なないでくれ…。」学生たちは一瞬我が耳を疑い、場内は水を打ったような静けさになったという。戦場で国のために死ぬことが日本男子の名誉とされ、生きて帰るなどとは口が裂けても言えなかった時代である。「一億玉碎なぞと、死にたい奴は死なせたらよい。しかし諸君には生きていてもらわなければ困る。戦争に勝っても負けても、国家が直ちに必要とするのは諸君なのだ…。」

\*

この壮行会でピアノ演奏をしたのが、日本人ピアニストの草分けとしてショパンコンクール(1937)に初めて入賞し「特別聴衆賞」も得て、世界から「東洋の奇跡」と称えられた国際的な名ピアニスト・原智恵子(1914~2001)だった。

彼女は13歳でパリに渡り、ラザール・レヴィイ、コルトー、ルービンシュタインなどに師事、コンセルヴァトアール(パリ音楽院)を首席で卒業しピアニストとしてのキャリアを着実に歩み始めたちょうどその矢先、戦争のため帰国を余儀なくされていた。帰国後は、戦時色濃厚な中であっても、芸術を求めて止まない人々の期待に応じて演奏を重ね、表現の自由が極度に制限された中でも、芸術の本来持つ自由な精神を決して失わなかった意志の人でもあった。

実は、当初彼女は出征壮行会なら出演しないと固辞したと伝えられている。ところが、兼松講堂には当時日本に3台しかないといわれたドイツ製ベヒシュタインピアノがあると聞いて、まさかと驚き、「そのピアノを弾かせていただくために…」ということで演奏が実現した。

\*

山口茂教授の壮行の辞に引きつづいて原智恵子がピアノを演奏した。そして演奏が終ると自ら進んで演壇に立ち挨拶した。「本日は思いもよらぬ素晴らしい会にお招きをいただき感謝しております。ただいまは戦(いくさ)に向かう若者の情熱を讃えたショパンのポロネーズを演奏いたしました。行く日があれば必ず帰る日もあるはず。ご凱旋のときにはぜひともまたお招きをいただきたい。みなさま、お健やかに…。」

この美貌のピアニストは両手を前に固く結び、両眼からとめどもなく溢れ出る涙は頬を伝って流れ落ちていた。



～生菓子も焼菓子も‘くにたち’がいっぱい詰まっています～

‘くにたち’らしい‘くにたち’だけのお菓子がここにはあります



洋菓子

国立白十字

南口店 国立市中1-9-43 042(572)0416  
富士見台店 国立市富士見台1-37-28 042(572)1718



この壮行会の翌日にはもう憲兵が来校し、教授の話聞いた学生に内容を聞きまわっていたという。壮行会の翌月11月3日、兼松講堂では創立記念を兼ねた文化厚生会 (=文化祭) が行なわれ、ふたたび原智恵子が演奏している。

その後まもなく、三鷹の中島飛行機の工場が空襲で大きな損害を受けると、その翌日には大学に憲兵があらわれ、つづいて軍人に先導されて工作機械類が次々とトラックで運び込まれ、兼松講堂は座席が取り外されて一夜にして「軍需工場」と化した。

そしてこの日を境に、ベヒシュタインピアノは片付けられた。いよいよわが国も、そして「東京産業大学」と改称させられていた東京商科大学 (現一橋大学) 兼松講堂も終戦までの厳しい道のりを歩むことになる…。

\*

そして幾星霜…。老朽化した兼松講堂は「如水会」(一橋大学の同窓会組織)によって70数年ぶりに大改修され(コンサートホール)としても蘇った。平成17(2005)年7月18日、満堂の聴衆を集めて、第1回「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」『ピアノ四重奏のタバー上田京・恵谷真紀子とウィーン・フィルの仲間たち』が行なわれた。それを聴かれた往年の卒業生Eさんは当日のアンケートにこう記している。

「61年前の学徒出陣の思い出が残る兼松講堂が、今、こうして地元の方々に愛されているのは本当に嬉しい。」

(了)

♪ この稿は、一橋大学同窓会誌「如水会々報」に寄稿した田中秀一さん(1949年専門部卒、故人)の鮮烈な思い出や田澤義彦さん(1950年学部卒)の証言などをまとめた、一橋大学広報誌『HQ』Vol.3(2004年春号)「記憶の中の兼松講堂—激動の昭和史をみつめてきた講堂2」によっている。

♪ 1853年にベルリンに設立されたベヒシュタイン社のピアノはリストやドビュッシー、名ピアニストのシュナーベルも愛用したという。兼松講堂にあったベヒシュタインのグランドピアノは1923年製。戦前・戦後の一時期まで原智恵子、安川加壽子などが国の代表的ピアニストがたびたび来校し演奏している。

以後半世紀余、ひっそりと大学の片隅で眠っていたが、2003年、如水会(一橋大学の同窓会組織)によって修復、みごとに蘇った。現在は如水会館におかれ、「如水サロンコンサート」などで使用されている。

## ☆ 次回コンサートのご案内 ☆

### 第34回「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」

#### ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト Vol.9

### ベートーヴェン：「皇帝」&「三重協奏曲」～オリジナル楽器による

仲道郁代、渡邊順生ほか、わが国の古楽演奏界を牽引するソリストたちによる2大協奏曲。ベートーヴェン時代のフォルテピアノとプロ・オーケストラ(ピリオド楽器使用)とが協演する往時の響きをお楽しみ下さい。

プログラム： ピアノ協奏曲第5番「皇帝」 変ホ長調 Op.73

独奏：仲道郁代

ピアノ、ヴァイオリンとチェロのための協奏曲 八長調 Op.56

独奏：桐山建志(Vn)・花崎 薫(Vc)・渡邊順生(Pf)

管 弦 楽：ザ・バロックバンド(ピリオド楽器によるプロ・オーケストラ)

使用ピアノ：ナネット・シュトライヒャー作フォルテピアノ(ウィーン、1818年)

2020年5月24日(日) 14:00開演

チケット発売予定：2019年12月

\*本日の「アンケート用紙」にご連絡先をご記入ください。お早めにご案内を差し上げます。

1,700種類を超えるワインは最適な環境で、  
お手元に届く日を待っています

せきやは、みなさまの暮らしのひとときを彩ります



SAKE-BOUTIQUE

**SEKIYA**  
Depuis 1910



国立せきやビル1F・B1F

☎042-576-3111(代表)

☎042-571-0001(店・直通)

営業時間/11:00~22:00

◀立川 JR国立駅 新宿▶

銀行 ● 南口

タリクス

**SEKIYA**

国立せきやビル